

大学生の「活字離れ」について

教育学部助教授

毛利 猛

大学生の「活字離れ」が言われるようになって久しい。このことは、少しおおげさかもしれないが、大学と大学における学問の存立自体に関わる大きな問題であるように私には思える。

大学における学問、とりわけ文科の学問は、活字文化の上に花開いたものであり、活字メディアと読み書きの能力の衰退は、そのまま大学における学問的営為の基盤をゆるがすことになるからである。しかしながら、大学関係者の間では、「読むこと」「書くこと」の衰退が、大学という制度とその知的基盤をおびやかしているという危機意識は、一部を除いてかなり希薄であるように思う。

人間の考えるという活動は「言葉を繰る」ことで成り立つから、言語性の能力の低下は、実はそのまま、考える力の低下に直結すると考えてよい。大学において、これまで「読むこと」と「書くこと」が何よりも重視されてきたのは、それが「ものを深く考える」のに不可欠のリテラシーであったからである。もし、今の大学生が「読もうとしない」「書こうとしない」のだとすれば、それは「ものを深く考えようとしなない」という「反知性主義」の態度の現われである。

大学で学ぶということの特徴が自学自習にあり、まづもって「本を読む」ことがその最も基本的なスタイルであるとすれば、「読書嫌い」の学生が増えたことは、大変由々しきことである。本を読もうとしない大学生が多数派になると、本を読まないことは少しも恥ずかしいことではなくなる。少しだけ知的に背伸びをして、難しい本にチャレンジすることもなくなる。こうして大学のなかに「反知性主義」のムードが蔓延していくのである。

とはいえ、私は今の大学生に自ら学ぶ意欲がまったくないとか、彼らが根っからの「読書嫌い」だと

は思っていない。京都大学高等教育センターの田中毎実氏が言うように、表面上の「反知性主義」(端的には「読書嫌い」という形で現われる)の背後に隠れて見えにくくなっているが、ある種の「健全な知性主義」が学生たちにまだ共有されていることも確かである。要は、われわれが日々の授業のなかで、この学生たちの潜在している「健全な知性主義」とどのように連携できるかが問われているのである。

その点、授業のなかで学生を飽き飽きさせることは、大変罪深いことであると思う。飽いた心はもう何も学ぼうとしないからである。大学の授業は、進んで本を読みたいという気を起こさせるもの、授業外の自主的な学習への取り組みを刺激するものでなければならない。

言うまでもなく、図書館は、そのような学生の自学自習を手助けするためにはならない施設である。

